

デザイン基礎学研究センター活動報告（2023年1月～12月）

古賀，徹
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

増田，展大
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

結城，円
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

<https://doi.org/10.15017/7170839>

出版情報：芸術工学研究. 39, pp.41-52, 2024-03-11. Faculty of Design, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

デザイン基礎学研究センター

活動報告（2023年1月～12月）

Center for Design Fundamentals Research

Annual Report: 2023/1~12

古賀徹 ¹	増田展大 ¹	結城円 ¹
KOGA Toru	MASUDA Nobuhiro	YUKI Madoka

概要：デザイン基礎学研究センターとは

デザイン基礎学研究センターは、「デザインとは何かを根底から考えることを通じてデザインのアイデンティティを確立し、デザインの各分野の融合を図るとともに、それによって従来のデザイン領域を拡張し、未来のデザインを構想すること」（設置趣意書）を目的として、2022年の4月に芸術工学研究院・部局内研究組織として設立されました。

「デザイン基礎学」とは聞きなれない言葉ですが、デザインを一つの学として成立させるための思考の蓄積を指します。そのために、デザイン史、芸術史、芸術批評、デザイン批評、美学、倫理学、認識論や存在論といった人文系の学問領域を基礎として、さまざまな研究領域とのクロスオーバーを目指しています。その活動の概要と詳細はウェブサイト（www.cdf.design.kyushu-u.ac.jp）に掲載しています。

活動は以下の4つの柱を意識しています。

1. PROVOCATION: デザインを根底から問い直す刺激的な批評の実践
2. LITERACY: デザイン基礎教育・共通教育の開発と実践
3. SYSTEMATIZATION: デザイン方法論の解明とその体系化の試み
4. DIVERSIFICATION: デザインにおける文化的多様性の推進

研究センターの2023年度の構成員は、古賀徹（センター長）、増田展大（副センター長）、結城円、Chen Ash、尾方義人、栗山斉の6名であり、月2回の事務局会議・研究会を開催して各種の企画・実施に当たってきました。

以下、2023年（1月～12月）の活動概要とその内容の報告となります。

1. 2023年（1月-12月）の活動概要

2023年の新規事業として、本研究院の丸山修准教授を座長とする「数理モデルデザイン研究会（Society for Math for Design）」を計4回、実施しました。これは「数理モデルのデザインを中心に位置づけ、『デザインのための数理モデル』と『現象理解のための数理モデルのデザイン』という座標軸を意識しつつ、研究と教育の視点から幅広く議論するサロンの場を作ることを目的としています。研究センターの構成員には人文系の研究者が多いのですが、高度な数理的内容であるにもかかわらず、座長や講演者のわかりやすい解説・プレゼンテーションのおかげで専門外の参加者にも理解できるものとなり、アーティスト、生物学の研究者、数理・統計の専門家、加えて外部からの参加者などを得て、分野を超えた密度の濃い議論を毎回展開することができました。数理を基軸としたデザイン教育・研究の柱を予感させるものとなりました。

このほかにも、研究センターの正式設立以前から実施している「デザイン基礎学セミナー」（第27・28回）や、部局内の各種の活性化制度プログラムとの共催企画等を通じて、講演・シンポジウム・セミナーを主催・共催し、そのレビューをセンターウェブサイトに掲載しています。

さらに芸術工学部の改組によって、あらたに設置された「デザインリテラシー科目群」および各種の基幹教育・学部共通教育について、その授業の一部を企画・実施しました。とりわけ今年度の「デザインリテラシー科目・文化とデザイン」は、デザイン基礎学セミナーを通じてつながりができた講師との共同授業を実施し、学生の賛

連絡先：古賀徹、designfundamentalsseminar@gmail.com

¹九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門
Department of Future Design, Faculty of Design, Kyushu University

否両論を巻き起こすかなり刺激的な内容の講義となりました。設立以前から取り組んでいる「デザインの基礎概念」についても、その項目記事の執筆（計5本）を着実に進めています。

2024年の展望としては、「デザイン基礎学セミナー」「数理モデルデザイン研究会」を中心とした先鋭的な批評の実践、「デザインの基礎概念」の拡充を中心とした研究センターウェブサイトの充実、新設される基幹教育「デザイン史 I/II」、美術史・美学・デザイン哲学関連の授業実施とならんで、センター発の独自のデザイン思想（存在論的・非人間中心主義的デザイン）の発信などが考えられます。

以下は、2023年1月から12月までの活動内容から、その一部について詳細を紹介します。

2. PROVOCATION: デザインを根底から問い直す刺激的な批評の実践

2.1. デザイン基礎学セミナー【主催】

第27回デザイン基礎学セミナー『路上のフェミニズム—キレイな都市を台無しにすること』

日時 2023年5月26日（金）

会場 大橋キャンパス2号館3階共用会議室+オンライン開催

講師 いちむらみさこ（アーティスト）

趣旨: 「ダイバーシティ」や「サステナビリティ」を掲げて進められる都市再開発の中で、貧困層やホームレスの人たちの追い出しが起きている。だが、路上の人々のうちには、身体性に基づく細やかな助け合いの関係が様々に張り巡らされている。都市の浄化に抵抗し自分たちの居場所を培う活動や、アートプロジェクトの事例について語る。

レビュー: 「ひとがそこに「いる」ことの権利」

いちむらみさこさんは、ひとがそこに存在すること、誰かの傍らにただ「いる」ことの尊厳について話をしたのだと思う。

アーティストのいちむらみさこさんは、東京藝術大学を卒業した後、既存のアートシーンではなく、公園で野宿をする人たちのところで自分の芸術やデザインの能力を活かしたいと考え、すでに20年ほどにわたって、そこで住居をともしながら、そこを拠点に様々な活動を

繰り広げてきた。

なぜいちむらさんは美術館ではなく公園を選んだのだろう。考えるに、公園の野宿生活においてこそ、人が生き存在するということが剥き出しになり、その根底的な次元に関わることでアートやデザインの核心が具体化できると、いちむらさんが考えたからであると思う。

路上や公園では、ひとびとは身近なもの、捨てられているものを様々に組み合わせることで自らの生存を保っている。その組み合わせのうちには、人の能力の組み合わせ、つまり人と人との助け合いもまた含まれている。公園には、散髪屋さん、大工さんなど様々な職能を持った人たちが住み込み、その人たちが自分の能力を活かし、互いに助け合って暮らしているといちむらさんは言う。だがそこにはむろん、職能ではない能力、ひとを気遣いケアする微細で繊細な能力も含まれている。

これらの組み合わせと助け合いのありさまこそが、いちむらさんの表現の基礎となる。野にある草花でも何か持ってくれば誰でもお茶が飲めるエノアール・カフェ(絵のあるカフェ)、野宿する女性たちの集まりである「ノラ」が開催するパンティー・パーティー(パン&ティー・パーティー)、女性たちのためのマトリョーシカ布ナプキン、野宿者やそのほかの人たちに向けたZineの発行など、誰かを支えることがそのまま表現となる多彩なアートをいちむらさんは繰り広げている。

野宿生活には夏の灼熱、冬の凍えといった自然の厳しさに加えて、通行人からのたえざる襲撃や嫌がらせがある。段ボールハウスが放火されるという衝撃的な事件に対して、いちむらさんは野宿者の段ボールをロケットに見立て、そのまわりに星をちりばめる「作品」を考案した。「ロケット」や「流星」と題されるこれら一連の作品群は、暴力行使を通行人に思いとどまらせると同時に、寝たままに都会の夜を旅するいちむらさん独特のファンタジーを表現するものとなっている。

他方で公園の野宿生活にはデザインの原初的なありかたが示されていると私は考える。生存限界に対抗する物資と能力の組み合わせ、互いの助け合いの工夫(devising)こそがそれである。脆弱であるとともに強靱でもある、そのような営みの積み重ねこそが野宿生活者の、野宿生活者としての尊厳をかたちづくる。そこにおいてデザインは明確で確固とした意味を保つだろう。

とはいえ、そのような営みには次のような疑問を投げ

かける人もいるだろう。野宿者は公共の場を占拠している、「キレイ」な街を汚している、収容を拒否して好き勝手やっている、姿や匂いが不安で不快だ、結局のところどういう状態を望んでいるのかわからない、どこか見えないところに追いやって欲しい、と。

だが、私の考えでは、野宿の人々はこの社会が回転するときに必然的にいわば「分泌」されてくるものである。それだけにその人々の姿はこの社会の本当の姿を可視化していると思われる。だからこそ、この社会に適応して生きている人たちは、野宿の人たちを見て不安になる。きれいな自分は実は汚いのではないかと。

それは私もそうである。私がふだんの生活のうちで恐れ、否定しているものが、自分の生活の本当の姿として眼前に突き付けられる。だからそれを排除し、思わずそれに暴力を「振るってしまう」。自己自身を否定するこの強迫衝動こそが、世にいう差別というものの本質なのである。だからこそ、野宿する人に対する殺人や放火などの暴力を見聞きして、まるで自分がそれを行使してしまったかのように私は動揺する。自分はそんなことをするはずがないのに、それを日々なしているのではないかと。

「キレイな都市」を実現しようとするデザイン主体もまた、「役に立たない」、「たんなる」、「気持ち悪い」何かを自分のなかに抱え込んでいるのだと私は考える。そのような否定的なものを抑圧し、排除して、自分を「キレイ」に仕立て上げたとしても、そのようなデザインはその当人自身と決して和解しないし、これまでの強迫的な自己をただひたすらに強化するだけであろう。

既存の社会が分泌し、忘れ去っている野宿者という「存在」は、沈黙したその姿において、従来の強迫的な社会に反省を迫っているのだと私は考える。潜在的なその可能性を現実化することが、いちむらさんの「作品」が発揮するもう一つの力なのだと思ふ。自己自身の強迫性を解除し、自己の存在と和解して、自己変革することがその作品の希望である。

いちむらさんの「作品」が示しているのは、たんに生きていること、ただそこに存在していることの意味である。いちむらさんのアート活動において、これまで劣ったジェンダーだと誤って見なされ、社会に置き去りにされてきた女性的なるものと「路上」が接触するもの、おそらくはこの点においてであろう。それらの「作品」との向きあい次第で、社会はその「存在」に助けられ、支えられることになると思ふ。

だとすれば、いちむらさんがいう「キレイな都市を台無しにすること」とは、役に立たないものと役に立つものの、存在するものと機能するものとの支えあいの次元を切り開き、まだ見ぬ都市の姿を妄想させる積極的なデザインを意味することになる。(古賀徹)

第 28 回デザイン基礎学セミナー『教育のり・デザイン——子どもたちのいる風景を社会に開く』

日時 2023 年 10 月 3 日 (火)

会場 芸術工学図書館閲覧室 + オンライン開催

講師 酒井咲帆

趣旨：子育てや教育の抜本的な改革が求められている。だが、行政と市民、学校と親の対立関係に収まるかぎり、子どもたちの居る空間は閉鎖していきばかりではないだろうか。写真家として出発し、街角の公園から保育園を開園するにいたった実践家に、社会に開かれた風景としての教育のり・デザインを聞く。

レビュー：

今回講演していただいた酒井咲帆さんは「コミュニケーション」の人だと思う。写真家としてスタートした彼女は、写真を撮影することを通して、子どもたちとのコミュニケーションを始めた。一見なんの繋がりもないように見える写真家としての活動と、保育園の創設、地域社会へ場を開いていく活動、子どもの権利を実現するための取り組みは、「コミュニケーション」という機能により繋がるように思う。

日本でのコミュニケーション方法は特異だ。こと教育現場ではヒエラルキーが存在し、コミュニケーション自体難しいように感じる。子どもは大人のルールに従い、教育されていく対象として見られている。そのような構図自体を、コミュニケーションを通して解体していっているのが酒井さんではないだろうか。

彼女のコミュニケーション方法は独特だ。彼女自身がスポンジのように他者の意見を吸収しながら、他者は彼女の意見も同時に聞いているような不思議な感覚を与えられる。そのようなコミュニケーション方法を彼女は写真家としての活動から身につけていったように思う。

専門学校生だった 10 代終わりの頃から富山の子ども達と定期的に交流し 10 年に渡って撮影し続けた写真集および写真展『いつかいた場所』、アフガニスタンの紛争地帯の子ども達を使い切りカメラで撮影した写真での展

覧会、改修前の福岡市美術館学芸課にあった作品として価値のあるものからゴミまでを扱った「モノにきく」展など写真家としての活動を展開している。例えば大阪の保育園の子どもたちとの交流プロジェクト「つちのかみさま、たびにでた」では、「つちのかみさま」と名付けられたオブジェが旅に出た様子を撮影した写真と、それに対する子どもたちの反応、変化していくオブジェと子どもたちの関係性を、写真を通して編集していく。彼女は、このような写真を撮り・提示するという行為を通して、物事を「そのまま見る」ことの難しさと素晴らしさを、身をもって体験している。そこから、他者の見方をそのまま受け取り、その上でコミュニケーションを行い、関係性を作ることの重要性を、感覚的に身につけているように感じる。

このような経験が、彼女が創設した保育園での子ども達の活動、古小鳥公園の整備、子どもの権利についての活動につながっているように思う。写真家としての活動のように、彼女の活動の場では、モノをめぐるコミュニケーションが発生し、同時に地域の人びととの関係が作られていき、結果的にそこが「保育の場」として開かれていっている。子どもは守られるべき存在であり、教えられる存在であると考えてしまいがちである。しかし、彼女の活動では、子どもと大人との関係性がフラットで、子ども自身が言葉だけでなく態度や表情などあらゆる手段で自分の思いを表し、それがそのまま受け止められる土壌が作られていっている。

教育のり・デザインと言うと、子どもをどう教育するのかという方向に考えてしまいがちだ。しかし、実際問題はすでに教育が終わっていると考えられている大人の問題であると、本講演から再確信した。コミュニケーションをとり、意見交換を行い、何かを共に造り上げていく（あるいは造り上げていかない）というプロセスをただただ繰り返していくことが重要なのではないだろうか。その中で、彼女のようなコミュニケーション方法を大人が身につけることが、教育のり・デザインの近道のような気がする。目に見える何かではなく、じわじわと浸透していくような、そんなほんの少しの大人側の変化が、今後の教育のり・デザインに繋がっていくのだと思う。（結城円）

3. LITERACY: デザイン基礎教育・共通教育の開発と実践

3.1. 授業設計

- ・ 芸術工学部

デザインリテラシー科目群「文化とデザイン」、「社会とデザイン」、「デザイン論 I/II」、共通課題 PBL 演習（「シミュレーション」の実践）、臨時開講科目「キュレーション構想論」

- ・ 次年度以降

基幹教育科目「デザイン史 II」

コース間共通科目「西洋美術史」

3.2. 授業紹介

デザイン基礎学研究センターでは、芸術工学部全体にかかわる臨時開設科目・デザインリテラシー科目を中心として、様々な授業を共同して企画し実践しています。授業についてのフィードバックを共有しつつ、授業内容の改善に努めています。そのうち以下三つの授業について紹介します。

2023 年度・春 デザインリテラシー科目「文化とデザイン」（古賀徹）

芸術工学部での授業が始まったばかりの2年生を対象として、生活に根ざし、生活をよりよいものにしていくためのさまざまな「工夫 devising」を生活者として自ら実践している人たちを講師として招き、デザインについての思考を拡張し、進学や就職を目的とした手段としての学習のあり方を見直してもらうことを目的としています。

そのために、フリーランスとして活動し独自の観点から様々なリノベーション活動を実践しているグラフィックデザイナーのアラタ・クールハンド氏、セルフビルドで自宅や自給自足の生活を構築している本山早穂氏、公園でホームレス生活を営みながらジェントリフィケーションに対抗的な活動を展開しているアーティストのいちむらみさこ氏、芸工研究室発のスタートアップ企業ドネルモの代表理事でソーシャルデザインに取り組む山内泰氏を講師として招いた共同授業を行っています。

今年約 180 名が受講しましたが、受講生のかなりの割合が授業内容に対する批判的意見を述べ、賛否両論うずまく論争的授業となりました。511 の大教室で実施し

たにもかかわらず、自ら挙手して講師に対して批判的意見や質問を堂々と表明する学生の姿には強い印象を受けました。

この授業では、毎回、氏名を明記したうえで全員に対して公開するという原則で学生にミニレポートを課しています。それらのうちには、本来の使用目的を逸脱して公共空間を占有している、税金を払っていない人に税金を使うべきではない、少数者の不利益のために技術の発展や経済的開発が妨げられてはならないなどと、ホームレスや社会的マイノリティに対する排他的ともとれる意見、技術の発展に伴う社会的排除を肯定する意見がかなりの程度存在しました。

そのような意見が公然と表明される背景には、社会的制度や理念に対する基本的知識や現行の支配的価値観を相対化する力の欠如があるのだと思います。しかしながら、「私の考えはヒトラーと同じだったのかもしれませんが」という言葉にみられるように、授業が進行するうちに悩み、自分の考えを模索するような様子も学生の一部には見られました。同じ学生のレポートの続きの一部を引用します。「全体の福利のためには排除ベンチがあった方がいいと思っていましたが、ホームレスの方を『しかたのない犠牲』だと考えるのは良くないことだと思います。(略)人知れず苦しいホームレス生活を送っている方々のことを考えると、なんとか包摂できないかと思ってはいるのですが、公共の場を占領することを新たな生き方の一つとして主張してくることにについてはやはり図々しいと感じざるを得ません」。

いずれにせよ、学生たちがこれまでの自分の経験を超えるような生き方や考え方に触れるにつれ、肯定的な反応や拒絶的な反応が生まれるのは自然なことであると考えます。「この8回の講義でこれから生きていく中でほぼこんなに詳しく学ぶことがないような刺激的なことを学んだ」という感想が示すように、その反省のプロセスは学生にとっては肯定的であれ否定的であれ刺激的な経験であったようです。学生たちの言動や言説に講師としても苦しんだ授業でありましたが、「本当に初めて芸工に来てよかったと心から思う講義であった。このような興味深い講義がこれから増えると思うと楽しみだ」という意見が少数ながら存在したことは救われる思いがしました。来年度は、感情的反発を招かないような形で社会的少数者がおかれた社会的立場を理解させ、セルフビルドやリノベーションといったデザインの在り方にも理解が得られる授業のさらなる「工夫」が必要となると考えま

した。

2023 年度・春 臨時開設科目「キュレーション構想論：都市の写真論」(結城円・増田展大)

この授業は、写真作品の受容が展示手法によっていかに変化するのかを体感的に実践することを目的として、1) 都市を被写体とする写真史・写真論をめぐる講義、2) 国内外の写真家を招いたワークショップ、3) 学生たちによる写真展の企画構想とプレゼンテーションを実施しました。

最初に、写真史や写真論をめぐる基本的な講義を受けた学生たちは、その後、合計3名の写真家をゲストに迎えたレクチャーとワークショップに参加しました。なかでもドイツ在住の写真家で、国際写真賞 HARIBAN AWARD (International Collotype Competition) 2022 の大賞受賞により日本滞在中であった小島康敬氏は、大橋キャンパスにおいてレクチャーとワークショップを開催してくださいました。学生たちは実際に数十枚の写真プリントを手に取り、それらを並べ替えることで、個々の写真のもつ印象がどのように変わるのか、また写真の被写体がどのように意味づけられるのかといった点について検討しました。続く5回目以降の授業では、Jens Liebchen 氏 (ベルリン)、佐藤信太郎氏 (東京) にオンラインで授業に参加いただき、それぞれご自身の作品 (集) を紹介しつつ、その撮影から展示、写真集の編纂までのプロセスを丁寧に解説してくださいました (この場を借りて、大変貴重な機会をくださった3名の写真家の方々にあらためてお礼申し上げます)。

これら3名の写真家に共通するのは、東京やベルリン、ロサンゼルスなど、都市を主たる被写体としていることです。写真の画角や構図、被写体などの内容はもちろんのこと、さまざまな街頭の風景を並列させるだけでも、写真はそれぞれの都市や時代を横断しつつ、その相貌や印象を大きく変えることになります。最終的に留学生も交えつつ学生たちは相互に意見を交換し、3者の写真作品をそれぞれが自由に並べ替え、展覧会のタイトル・コンセプト・会場設定・狙いなどを個別に発表する作業をおこない、キュレーションによる写真の多面的な展開を構想することができました。

今回の授業は試験的に始まったものですが、作品そのものの制作や設計を大きく左右するであろう「キュレーション」というデザインの実践に着目した内容は、今後

さらに展開する予定です。

2023 年度・秋 デザインリテラシー科目「デザイン論I」 (増田展大)

この授業は3年生を主な対象としてオーソドックスな講義形式をとりつつも、本年度より授業内容を刷新することになりました。その内容は全8回にわたって3つの隣接領域(テクノロジー、エコロジー、アンソロポロジー)における思想を概観し、それらをデザインに関連づけて検討するものです。

これら3つの領域は共通して、すべてが近代と呼ばれる時代に登場した(または少なくとも、現在と同様の意味を獲得するようになった)ものです。テクノロジーについては、その語源である「テクネー」に遡ることもできれば、西欧の技術論ではしばしばその源流として「プロメテウス神話」が召喚されることにもなります。ただし、それらを近代以降のメディア技術へと展開するなら、現在のインターネットに象徴的に示されるように、全地球規模での拡張を果たしたテクノロジーはもはや「生態」に喩えられるほどになっています(メディア・エコロジー)。このエコロジーという言葉の出自は20世紀初頭(エルンスト・ヘッケル)であり、自然環境を物理・経済的に捉えようとする「生態学」を起点としつつも、戦後にかけて私たちにも馴染み深い環境思想(ないしエコロジカル・デザイン)が展開してきました。そして最後の「アンソロポロジー」とは、人類を対象とする学問領域にほかなりませんが、最近では上述のテクノロジーやエコロジーと重なり合い、「存在論」や「非人間中心主義」といった観点のもと、デザインの理論や実践と急接近を見せています。

この授業では以上、3つの領域の交差するところに「デザイン」を位置付けることで、それぞれを成立させた歴史的条件がどのようなもので、その内容がいかに関連づけられるのかについて(本研究センターウェブサイトの「デザインの基礎概念」も参照しつつ)講義を進めました。学生たちは各回、具体的なデザインの事例を挙げて自身の考察を展開する小レポートを提出し、それらを授業内でも振り返りつつ独自のデザイン論を展開しました。それらの内容は今後、継続して開講される「デザイン論II」などを経て深化させたいと考えています。

4. SYSTEMATIZATION : デザイン方法論の解明とその 体系化の試み

4.1. 数理モデルデザイン研究会 (Society for Math for Design) 【主催】

*以下は、丸山修准教授のレビューにもとづいてセンターが内容を一部パラフレーズしたものを「内容」として掲載しています。丸山准教授のレビューについては、センターのウェブサイトでお読みください。

第1回 数理モデルデザイン研究会 「芸工と数学、機械学習の可能性」

日時 2023年1月30日(月) 18:20~19:30

会場 九州大学大橋キャンパス5号館7階芸情ゼミ室

登壇者 尾方義人, 丸山修

内容: 認知症当事者や障害をもつ人たちの行動や心理量を数量化し、どのように分析するか、そのための数理的な概念やモデルが必要とされている。これに対して、〈画像データに対する畳み込みニューラルネットワーク〉や〈自然言語に対する ChatGPT, AlphaCode, BioGPT〉という一連のツールが存在し、ヒトの特定機能に絞ってモデル学習をさせることで人間の機能レベルに達する機械学習手法が確立されつつある。学習の成功の鍵は大量学習データの存在にあり、Super data-driven の時代が来ている。

これまで深層学習の主な領域は視覚情報、言語情報であったが、次の草刈り場はヒトの内面機構に依存した感情的な応答反応に移りつつある。ヒトの精神的な応答反応についてのデータベースや学習モデルが構築できれば、感情をシミュレートする介護ロボット、ゲーム内の AI キャラクター、メンタル支援を目的としたささやきアプリの開発など、芸工の問題関心に応じた展開が可能となる。

第2回 数理モデルデザイン研究会 「ベイズ推定によるデータの解析と現象のモデル化」

日時 2023年3月27日(月) 18:20~19:30

会場 九州大学大橋キャンパス デザインコモン 2F

登壇者 澤井賢一

内容: 機械学習は膨大なデータを読み込んでそこから適切な答えを導こうとするが、得られるデータ量が少ない

場合には、ベイズ推定と呼ばれる手続きが有効である。ベイズ推定とは、結果として生じたデータから出発し、それを生み出したであろう因果関係のモデルを想定する確率論的な手続きのことを指す。結果としての観測データが与えられているとき、それを生み出したであろう原因が実際に存立した確率 P は、その原因が存立する確率と、原因が与えられていると仮定してそこから当の結果が発生する確率とを掛け合わせたものに等しい、というのがベイズ定理である。

これを用いて知覚システムをモデル化することができる。脳は感覚器を通じた情報（結果）を通じて外界の出来事（原因）をつねに「推定」している。たとえば UFO を見たと思っていても、そもそも UFO が実際にそこに飛来する可能性（原因そのものが存立する確率）が低いし、それは何かの見間違いである可能性が高い（原因があるとしてもそこからその知覚が発生する確率が低い）ので、脳はベイズ推定を行って「UFO かなと思ったが何かの間違いだろう」と判断するという具合である。逆に授業の開始時刻に教員を見る場合、規定時刻にその教員が登場する可能性は高く、目の前の教員を誤認する可能性も低いので、「実際に教員がそこにいる」と判断できる。これにしたがえば対象の存在を判断する知覚とはすべて確率論的な計算に基づくことになる。これを音楽聴取に応用すると、聴取者が快を感じているとすればその原因として音楽の内的構造の理解が存在している確率なども考えることができるようになる。

さらにこれを機械学習に応用すれば、自然言語において応答からその応答を導き出した問いを推定することも可能となり、これには高い確率での推定が現在すでに実現している。一方で、化学反応など物質相互作用を結果から推定することについては予測が難しい状況がある。

第3回 数理モデルデザイン研究会「Making Nonsense」

日時 2023年5月29日（月） 18:20~19:30

会場 シアタールーム（7号館1階）

登壇者 牧野豊

内容：アート作品を構成する論理に機械学習を取り入れるのはなぜか、それはどのようになされるのか、その狙いは何か。

2021年の“Technical Ensemble”と題された牧野豊氏の作品においては、特殊なヘッドフォンを装着した複数の演奏者が合奏するのだが、それぞれの演奏者に自身を含

めた全奏者の音を次第に遅れて聞かせる。そうすることで音楽の「構成 composition」は、当初の意図を超えた「解体 decomposition」へと少しずつ移行し、その過程そのものが一つの楽曲を構成するようになる。

通常の機械学習は、機械的な翻訳がそうであるように、膨大な事例（用例）を学習することによって、特定の入力に対して最適な結果を安定して出力することを目指している。だが、この対応関係を意図的に遅延させたり不安定化したりすることで、特定の入力に対して意図を超えた出力（結果）を得られるようになる。牧野氏はこの不安定化の論理を生物学における摂動になぞらえて「積極的摂動 active perturbation」と呼んだ。当時進行中であったプロジェクト“Confabulation”は、その論理を用い人工知能に幻覚を起こさせることを目指すものであった。この摂動によってセンスはノンセンス化され、状況は偶然性に関われ、その変動に対応して人間の知覚が拡張され、それによるあらたな身体性が展望できるようになる。

第4回 数理モデルデザイン研究会「脳情報デコーディング」

日時 2023年7月3日（月） 18:30~19:30

会場 シアタールーム（7号館1階）

登壇者 元村祐貴

内容：近年、脳研究の分野においても機械学習を用いた手法が発展してきている。ある時点で特定の状態にある脳波や fMRI 信号、生体情報を計測し、コード化されたそれらの情報からそれを生み出したヒトの状態を推定するデコーディング手法が近年研究されている。測定された脳波をもとにして、その脳波を生み出したイメージ画像を推定し合成することがそれである。その推定には機械学習の手法が用いられている。この研究が進めば、様々な測定結果に基づいて、ある人が見たであろう夢の内容を映像として合成することも可能となる。頭部に電極を埋め込むことで猿が手足を使わずにビデオゲームをプレイできるなど、脳において意図するだけである特定の反応を状況に対して実現する技術はすでにある程度実現している。

4.2. ウェブサイト「デザインの基礎概念」

デザイン基礎学研究センターのウェブサイトでは、デザインの体系的理解を推進するためにダイアログを構築し、それに従って、デザイン史やデザイン思想の基礎概

念についての執筆を進めています。芸工内の多くの教員の方々や学外者による執筆を含め、すでに現在44項目の記事を日本語・英語にて掲載しています。今年度に執筆した以下の5項目のうち、一例を転載します。

新規執筆項目（今後、オンラインに掲載予定）

- ・ 「視覚文化論」(増田)
- ・ 「反工業化としてのデザイン行為(ラスキンとモリス)」(古賀)
- ・ 「フォード主義」(古賀)
- ・ 「テイラー主義」(古賀)
- ・ 「ヘパイストス」(古賀)

「ヘパイストス」

古代ギリシャにおいて、ひいては西洋文化全般において職人や工芸の地位は低かった。機械的な技術はつねに人文的な教養に比して第二級のものとしてされ、それが「専門」であるという理由で近代にいたってもなお、神学・哲学・法学を中心とした大学から排除されてきた。機械的な技術とそれに携わる者たちが知的にも、道徳的にも、かつ美的にも一段と低い存在だと誤って見なされるその例はすでに神話のうちにある。

鍛冶と工芸の神であるヘパイストスは自らの工房で様々な道具をこしらえることを生業とする。ゼウスの妻で結婚の神とされるヘラはゼウスと交わることなくヘパイストスを生むが、ホメロスの『イーリアス』によれば、両足に障害があるという理由で天から海に彼を投げ捨ててしまう。

しかしなにゆえに工芸の神ヘパイストスは血縁においてゼウスから隔てられ、さらに生まれながらの障害を持つ身として神話に描かれなければならなかったか。考えてみるにそれは工芸が生命の必要に拘束されていたためであったといえる。生命の必要を満たすことは、死すべき存在としての人間にふさわしく、生命から自由であるはずの神々にはふさわしくない。その点でヘパイストスの製作物のうちには不純なもの、つまり実用性が混入しており、したがってそれは神の属性たる善美の障害となるのである。いうまでもなくこのような障害観は今日では到底受け入れられるものではない。

とはいえ神々といえども武器や道具は必要である。ヘパイストスはゼウスから様々な用事を言いつかり、彼のためにまるで様々な実用道具を拵える使用人のように扱われる。それゆえヘパイストスはオリュンポスの神々の

一員であるとしても、つねに第二級のもの、歪んだものとして表象される。

神話が説くところによれば、工芸という歪みはヘパイストス自身の容姿や性格にも及んでいる。オリュンポスの神々の多くが容姿端麗とされるのに対し、彼はそうではない。しかもそうした自分の姿に劣等感を持ち、恨み深く、それゆえにこそ美に強烈な憧れを抱く存在として古代の文献に彼は描かれるのである。

ギリシャ神話はローマの作家の手によってラテン語に翻訳され、ローマ神話の中に組み込まれていく。紀元前64年ごろに生まれたラテン語の作家ヒュギヌスは、ヘパイストスがかつて自分を虐待した実母ヘラを、美的に粉飾された機械、すなわち宝石をちりばめた黄金の仕掛け椅子に誘い込み、拘束する話を伝える。

プラトンによればひとが美の有機性に憧れてそれに魅惑されるのは、現状の生活を営むための必要、つまり生命の機械性から解き放たれるためである。だがその椅子の本質は機械仕掛けの拘束具である。ここにはのちに一九世紀において応用芸術と呼ばれるデザインの類型と同様のものが見出される。イギリスのヴィクトリア朝期の消費者たちが、製品を装飾する応用美術の絢爛さに魅惑され、結局は資本主義と帝国主義の手中に陥っていくように、古代ギリシャの物語においても神々は美に誘われ、欺かれて、必然性の手に落ちるのである。

ヘパイストスはヘラを解放する条件として、美の神アフロディテとの結婚をゼウスに要求する。ゼウスはこの要求に応じ、ヘパイストスはアフロディテと結婚生活を始める。しかしそれは長くは続かない。周知のように、美の化身アフロディテは容姿端麗とは言い難い夫との婚姻生活に飽き足らず、夫の留守中に戦争の神アレスを夫婦の寝台に引き入れて恋仲となる。ホメロスの『オデュッセイア』は、楽人デモドコスがオデュッセウスに次のように歌った様子を伝えている。

ヘパイストスは、ひどく胸が潰れるこの話を耳にして、恐るべき企みを胸中に抱きつつ、ひとり鍛冶場へと歩み入り、床の上に巨大な金床据え付けて、恋人たちがその場で身動きできぬよう、断ち切るも抜け出すもかなわぬ鎖を鍛造した。鎖の網は蜘蛛の糸のごとくにか細く、祝福された神ですら誰も見分けができぬほど、念入りの細工の極みにあったのだ。(『オデュッセイア』、8-270)

ヘパイストスとの生活が示唆しているのは利便、安全、

体制、そして単調な反復である。これに対して戦争の神アレスがアフロディテに提示するのは美貌と官能、ならびに背徳のスリルである。ホメロスは美の神を、安全と退屈ではなく危険とスリルの方に赴く存在として描き出す。密通を知ったヘパイストスは、美と破壊が融合する頂点、生の自由の極点を機械の手で捕捉し、神々の眼前に晒し、そのうえで決定的な言葉を吐く。

二人の闇の熱がすぐ冷めるとて、
この恥知らずの女の代わりに父が手に入れた、
婚姻の贈物をそっくりそのまま返すまで、
網と鎖が二人をしっかりと掴まえ離しはしない、
その娘は美しくはあるが、自分を抑え得なかったのだから。
（『オデュッセイア』、8-317）

美が内から己れを自然に形象化できないなら、機械が外から型に嵌めるしかないヘパイストスは考える。婚姻とはまさにそのような拘束であり、その拘束をもたらしたのは、娘の所有者である父親との取引、すなわち美と実用物との交換である。このようにヘパイストスは有機性と機械性を引き換えにし、そうすることで両者を混ぜ合わせてしまう。

アポロドーロスによれば、ヘラは男と交わることなくヘパイストスを生んだとされる。その理由として、ゼウスがヘラと交わることなく自分の頭部からアテナを直接誕生させたのをヘラが見たためと伝える説もある。これに従うなら、競争と卓越の神アテナはまさに全能の神ゼウスの頭脳を引き継ぐ存在であり、それと対照をなすのがヘパイストスということになる。そしてアポロドーロスが伝えるところによれば、アフロディテに去られたヘパイストスは、その傷を癒すため眼前のアテナに欲情する。

アテナは武器を調えるためヘパイストスを訪れた。だがアフロディテに去られたヘパイストスは、アテナに欲望を抱いて彼女を押し倒そうとした。アテナは逃げようとした。彼は何としてでも彼女に縋りつき（というも彼の足には障害があったから）、彼女と交わろうとした。アテナは身持ちが固くしかも処女であったので彼に応じなかった。それで彼は彼女の脚に子種を播いた。アテナは嫌悪して毛でこれをふき取り、地に投げた。（『ギリシア神話』、3-14-6）

アテナはヘパイストスの工房を自分の装備品のために

訪れる。ヘパイストスはこれに対してアテナに美を見出し追跡する。アテナが交わりを知らない純粋性を保つのに対して、ヘパイストスは業務とエロスを混ぜ合わせる。襲い掛かる生物の欲求から卓越の神アテナは必死に逃れようとする。だが逃げ切れぬその脚は機械男の下半身に汚されてしまう。オリュポスの神々の最高位に位置するのは、アフロディテやアテナのみならず、月と狩りの神アルテミス、文芸と音楽の神アポロンといった、生活から無縁で純粋な神々である。こうした第一級の神々の高さに比して、ヘパイストスがかくも惨めに低く描かれていることのうちには、労働への、工房と職工に対するギリシャの侮蔑が表現されている。自由であるべき有機性のうちへと、自由を拘束する機械性を混ぜてくることへの西洋文化に独特の嫌悪がそこに表出している。

古代の神話とそれを語る詩人の筆には、家父長的支配の影が色濃く差しており、女性を贈与物で獲得する習慣や婚姻制度に則った女性の評価など、今日では受け入れがたい当時の価値観が反映している。そうした当時の価値観に則って職人と工作が同時に低く位置づけられている。今日のデザインは、西洋文化の価値観に立脚しながらも、工芸への侮蔑的な価値評価をいかに克服し、「つくること」をいかに高貴に定義するかを心を砕いてきたといえる。（古賀徹）

参考文献

- ・アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、1978年
- ・ホメロス『イーリアス』松平千秋訳、岩波文庫、1992年
- ・ホメロス『オデュッセイア』松平千秋訳、岩波文庫、1994年
- ・ヒュギーヌス『ギリシア神話集』松田治・青山照男訳、講談社学術文庫、2005年

5. DIVERSIFICATION：デザインにおける文化的多様性の推進

5.1. 許家維(シュウ・ジャウエイ)映像作品上映会&アーティストトーク【共催】

日時：2023年6月9日（金）18:30～20:30

会場：九州大学大橋キャンパス デザインコモン2階

主催：令和4年度大学改革活性化制度「日本デザインを創造し国際発信できる人材育成のための教育プログラムの構築」

令和3年度大学改革活性化制度「メディアアートによる科学・技術の芸術表現への昇華を通じた価値の可視化プロジェクト」

本イベントは、許家維、張碩尹(チャン・ティントン)、鄭先喻(チェン・シェンユウ)の新作発表展「浪のしたにも都のさぶらふぞ」(2023年6/3~9/3まで山口情報芸術センター[YCAM]にて開催)に合わせて、台湾のアーティスト・許家維を大橋キャンパスに招くかたちで行われました。

許は映像作品やインスタレーションを中心に制作しており、それらは歴史的な文脈を神話的なテーマやグリーンバック、ドローンカメラ、コンピューターアニメーションなどの様々な現代の映像技術を組み合わせたり、また人形劇や能楽、漫才、宗教的かつ民族的な儀式といった伝統的な舞台芸術を多く取り入れてもいます。

許の作品の出発点は、台湾とその近隣諸国との複雑な歴史的関係につながる傍流としての特定の地域や場所です。彼はこれまで、アジアにおける冷戦時代の影響や日本の植民地時代について取り扱ってきましたが、本イベントではその内実について、許家維自身による丁寧な解説とともに映像作品5本「Ruins of the Intelligence Bureau」, 「Drones, Frosted Bats and the Testimony of the Deceased」, 「Mineral Crafts」, 「Black and White – Giant Panda」, 「A Performance in the Church」(一部)が上映され、その後、本学講師でキュレーターのAriane Baynが聞き手となってディスカッションが進められました。タイに残る中国の国共内戦の痕跡、台湾の旧日本海軍燃料工場、ゲーム「マイクラフト」、パンダ外交、考古学・音楽・芸術との出会いなど、許の探求的かつ実験的なアプローチはさまざまなテーマを扱ったものであり、最後には会場に集まった多くの聴衆から多様な質問や議論が交わされました。

5.2. BRAUN AUDIO 展 良いデザインの原理原則

美のアーカイブ研究プロジェクト Vol.1 永井敬二
コレクションBRAUN AUDIO 展【共催】

会期 2023年10月4日(水)–10月11日(水)10:00-18:00

※閉館日:10月7日(土),8日(日)

会場 九州大学大橋キャンパス1号館2階ギャラリー

主催 芸術工学研究院 尾方研究室

企画 山田敦貴

企画協力 永井敬二

共催 九州大学大学院芸術工学研究院・デザイン基礎学研究センター

5.3. サイエンス・プランターVol.28 反復／差異／境界 【共催】

日時 2023年11月2日

会場 芸術工学図書館

登壇者 伊原久裕・栗山斉・古賀徹

主催 令和3年度大学改革活性化制度「メディアアートによる科学・技術の芸術表現への昇華を通じた価値の可視化プロジェクト」

共催 九州大学大学院芸術工学研究院・デザイン基礎学研究センター,九州大学芸術工学図書館

6. 研究業績(個人別)

古賀徹 KOGA Toru

【学会発表】

- ・「バロックとヴァニタス—儂さをめぐって」,西日本哲学会大会,於福岡大学,2023年11月3日

【論文】

- ・「芸術工学のギリシア的起源:ソクラテス,プラトン,アリストテレスにおける有機的技術論」,『芸術工学研究』38,2023年3月,1-32頁

増田展大 MASUDA Nobuhiro

【学会発表】

- ・“Toward Decomposition as Resources for Media Art: Conclusive Remarks,” the Panel “(De)composing Media Art through Practices with Nonhuman Agencies” with Akiyoshi Yasuharu, Kazuhiro Jo, Juppo Yokokawa, Yosaku Matsutani, Re:source 2023, The 10th International Conference on the Histories of Media Art, Science and Technology, Università Ca' Foscari Venezia, Italy, 2023/09/16
- ・“Toward Nonhuman-Centered Design: Between Life and Matter,” Nobuhiro Masuda, Yosaku Matsutani, Yasuharu Akiyoshi, Juppo Yokokawa, Kazuhiro Jo, World Design Assembly Tokyo 2023, Design Research Institute, Chiba University, Tokyo, 2023/10/27
- ・「想像と物質のメディア考古学—『メディア考古学とは何か?』をめぐって」日本メディア学会 2023年秋季大会 WS4 (理論研究部会企画), 於オンライン, 2023年11月4日

【著述活動】

- ・ [作品解説]『再演 指示 (インストラクション) とその手順 (プロトコル)』(岩崎秀雄《Culturing <Paper>cut》, BCL/Georg Tremmel + Matthias Tremmel《Resist/Refuse》, 切江志龍+石田翔太《Soui-Renn - A Figure of Impression》, 齋藤帆奈《食べられた色 / Eaten Colors》) 平論一郎編, 美術出版社, 2023年2月, 63, 77, 85, 97頁
- ・ [特集編集]『生命を問いなおす 科学・芸術・記号』日本記号学会編 (叢書セミオトポス 17), 新曜社, 2023年7月
- ・ [論考]「マーク・B・N・ハンセン:テクノロジーと身体の間介者」『メディア論の冒険者たち』伊藤守 (編), 東京大学出版会, 2023年9月, 216-228頁
- ・ [評論]「パララックス・ビュー—永田康祐をめぐる視差的考察」『DAZZLER Co-program2022 カテゴリーB』林修平編, 2023年11月, 55-60頁

尾方義人 OGATA Yoshito

【展示】

- ・ 「良いデザインの原理原則 美のアーカイブ研究プロジェクト Vol.1 永井敬二コレクション BRAUN AUDIO 展」主催 (九州大学大橋キャンパス1号館2階ギャラリー, 2023年10月4日-10月11日)

【著述活動】

- ・ Jiang Yujian, Ying Meng, Ogata Yoshito, “Exploration of Experimental Methods based on Pose Estimation Techniques in Multi-Person Scenarios,” *Wireless Internet Technology* 2023(3), pp. 82-92.
- ・ Jiang Yujian, Ying Meng, Ogata Yoshito, “Research on the Establishment of the Evaluation Method of the Improved Design of the book based on the Artificial Intelligence Dynamic Capture Technology,” *Wireless Internet Technology* 2023(4), pp. 54-57.
- ・ 「社会包摂とデザイン 25 「こども」とは何か? 成年年齢の引き下げ」『住まいとでんき』第53巻1号, 2023年1月, 33-34頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 26 行政の仕組み 縦割り横割り」『住まいとでんき』第53巻2号, 2023年2月, 47-48頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 27 多次元の少子化対策」『住

まいとでんき』第53巻3号, 2023年3月, 31-32頁

- ・ 「社会包摂とデザイン 28 社会包摂漫画 マイノリティに関わる仕事」『住まいとでんき』第53巻4号, 2023年4月, 39-40頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 29 大谷ルールとベッパームル スポーツ文化と外国人」『住まいとでんき』第53巻5号, 2023年5月, 35-36頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 30 救急車をタクシー代わりに使ってはいけません 傷病者を搬送する制度」『住まいとでんき』第53巻6号, 2023年6月, 39-40頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 31 レディース・アンド・ジェントルメンとレディースデイ ジェンダーデザイン」『住まいとでんき』第53巻7号, 2023年7月, 33-34頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 32 失格判定と判断のプロセス プロセスをどう作り, どう見せるか?」『住まいとでんき』第53巻8号, 2023年8月, 29-30頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 33 ジェンダーギャップ指数指標を理解する」『住まいとでんき』第53巻9号, 2023年9月, 41-42頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 34 マイナンバーカードの社会性 未来へのデザイン」『住まいとでんき』第53巻10号, 2023年10月, 47-48頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 35 外国人と宇宙人 さまざまな帰属による自己意識」『住まいとでんき』第53巻11号, 2023年11月, 49-50頁
- ・ 「社会包摂とデザイン 36 選挙と投票の仕組み AKB からコンクラーベまで」『住まいとでんき』第53巻12号, 2023年12月, 29-30頁

【講演】

- ・ 第95回 Q-AOS ブラウンバッグセミナー「総合知とデザイン—未来を妄想し, 勝手に表現する—」, 主催:九州大学アジア・オセアニア研究教育機構, 2023年5月17日, 於オンライン
- ・ 「ジェンダーって何?身近な問題に気づく力」, 主催:男女共同参画ふちフェスタ実行委員会, 筑紫野市, 2023年6月24日, 於筑紫野市生涯学習センター3階視聴覚室
- ・ DIDI×アミカス公開講座「表現と対話から考えるためのデザイン」, 主催:九州大学大学院芸術工学研究院社会包摂デザイン・イニシアティブ, 福岡市男女共同参画推進センター・アミカス, 2023年11月

4日、於福岡市男女共同参画推進センター・アマカ
ス2階視聴覚室

栗山齊 KURIYAMA Hitoshi

【展示】

- ・ 個展「反復／差異／境界」於九州大学大橋キャンパス・芸術工学図書館1F映像音響ラウンジ[福岡]、2023年10月26日～11月7日、主催：九州大学大学院芸術工学研究院、令和3年度大学改革活性化制度「メディアアートによる科学・技術の芸術表現への昇華を通じた価値の可視化プロジェクト」、芸術工学図書館
- ・ グループ展「Scenery of the Emptiness, and Asia」、主催：Asia Culture Center、於国立アジア文化殿堂[韓国・光州]、2022年12月～2023年8月

【コミッションワーク】

- ・ インスタレーション作品《∴0=1-duality》、セレス中目黒[東京]、2月
- ・ インスタレーション作品《symbiosis》、上海前灘31[中国・上海]、12月

【講演、ワークショップ】

- ・ 『サイエンス・プランター Vol.28 反復／差異／境界』登壇、於九州大学芸術工学図書館1F閲覧ホール、2023年11月2日

【図録・記録集・報告書など】

- ・ *Scenery of the Emptiness, and Asia*, Asia Culture Center, 2023/7

結城円 YUKI Madoka

【学会発表】

- ・ 「写真の間文化的な時間性—荒木経惟『TOMBEAU

TOKYO』におけるヴァニタスと無常—」国際シンポジウム『VANITAS 現代美術と写真にみる「はかなさ」のイメージ 日独共同研究の成果から』2023年9月17日、於国立新美術館

【招待講演】

- ・ “Artistic Interventions at Natural History Museums” オンラインワークショップ Space Between/ Aidagara: Landscape, Mindscape, Architecture, University of Glasgow, 2023/3/7
- ・ 成城大学文芸学部創設70周年記念事業レクチャー&討論会「—写真と文芸の交わる場所— 澤田知子再読」2023年10月21日、於成城大学
- ・ “Photographing dolls and the Japanese visual artist Mika Kan: beyond the dialogue between Japan and the West”, (Not) A Doll’s House. Traditional Roles and Brand-New Images 展(ミュンヘン市博物館) 関連オンラインイベント Fotografie und Puppentheater aus Japan und Europa im Dialog, 2023/11/26

【著述活動】

- ・ “Daido Moriyama – Pate der japanischen Straßenfotografie?,” In: *C/O Berlin*, Nr. 34/ 13. Jahrgang, Berlin: C/O Berlin Foundation 2023, pp. 13-17.
- ・ “Photography in Japan, Marc Alexander in conversation with Madoka Yuki,” In: *European Photography*, No. 114, vol. 44, issue 2, winter 2023/2024, Berlin: European Photography, pp. 63-65.

Chen ASH

【学会発表】

- ・ 「概念の非同一的な作曲法：アドルノの『美の理論』における芸術の定義から」九州大学哲学会、九州大学、2023年9月30日